2015 リフレクション展反省会

日時：2015 年 12 月 19 日 17：00－18：20

会場：表参道画廊

ナビゲーター：相馬泰（写真家）

作家：阿部明子、榎本千賀子、田山湖雪、由良環

ゲスト：阪根正行（『アラザル』同人）、山方伸（写真家）

テキスト構成：榎本千賀子

相馬：この会は、お客さんのためというよりは、自分たちのためのトークということで進めてみよう。前回のトークでは踏み込めなかったような、展覧会の反省点や、お互いがお互いの写真についてどう思うかということについて、展覧会の完成形を見て、会期も終わりに近づいた今、忌憚なく語り合えるのではないか。また、自分自身の作品の並べ方などを、改めて他の人に説明してもよいのではないか。

この展覧会は、それぞれの写真家がある特定の場所を撮影する展覧会ということでスタートしたのだけれども、実際に展覧会で扱われていった場所は、12 日に「川」ということが指摘されたようにマージナルな場所へと収束していったと思う。自分としては、この場所の選択についても話し合ってみたい。

まずは、他の人の作品についてどう思うか、というところから始めてみようか。

■　由良作品とインスタレーション

阿部：自分がすぐに思いつくことから始めると、由良さんは、なぜもっと枚数を減らして、写真と写真の間隔を開けなかったのだろうかと思う。由良さんの写真は、自分だったら一枚一枚をじっくり見てみたい。そして、観客に対しても、そういう見方を写真と写真の間隔を使って誘導すべきだったのではないかと思ってしまう。例えば、由良さんは自分の写真について「物語を作っている」と説明していたと思うけれど、そのように考えるのであれば、もっと写真の枚数を減らしてもっと余白をつけてよかったのではないか。

榎本：私も、由良さんの写真は、写真と写真の間で色々なことを想像させられる、そういう写真なんじゃないかと思う。だから、余白のそうした働きをなぜ今回はあまり使わなかったのだろうかと思う。

由良：最初はそういうふうに考えて 7 枚で構成していたんだけど……欲が出て変わった。撮っている内に点数が増えてきた。ただ、終わってみると、Musee F のスペースの 2 枚の大きなプリントを、広い会場にも展開しても良かったかもしれないとは思う。また、実際に展示してみると、思ったほど会場が広くなかった。それに合わせて、額の大きさももっと考えてもよかったかと思う。

相馬：由良さんの構成には、阿部さんの作品が他の 2 人の壁と違って入らないという、展示全体の条件も

影響したのではないかな？

榎本：由良さんは少ない枚数だと足りないと思ったんですよね？傍から見ていると足りてるんじゃないか、とも思うんだけど。

由良：もったいぶった感じにしたくなくて……。自分では、自分の写真は一枚一枚の写真の力がそこまでないのではないかと思ってしまった。7 枚だと展示に耐えられないのではないか、と思ってしまった。

阿部：私は由良さんの写真は、今回の 4 人展のなかでも強い写真だと思う。観客が 1 枚あたりを見る時間が、おそらくこの展示の出品作品の中で、いちばん長いのではないかと思う。

由良：プリントの時に、一度標準に近いプリントを作ってみたら、それでは思っていることが伝わらないと思った。そして、戦争が近づいているような、暗い時代を表現したいと思って、黒いプリントを作った。それは、12 日のトークで、自分の写真の地面がよく濡れているということや、例えば移民を考えている人の視線のように見えると大日方さんに指摘されて改めて考えたことでもあるのだけれど。この作品はまだ制作の途中だから、自信がないんですよね。でも、途中段階だということを示すのに、一枚床に直に置くというレイアウトを採用したのは良かったと思う。

■　田山作品の変化

榎本：田山さんはこれから、どう展開してゆくんだろう。今回の展示について、どのように並べ方を考えたのかということと、自分で振り返って見て、今回の並べ方をどう思うかということを聞いてみたい。

　私自身は、田山さんの今までの作品では、こういうことがやりたいんだろうな、ということがよく見えていたと思う。例えば、これまでの作品では、大日方さんとのトークで言っていたような田山さんが感じている「神々しさ」であるとか、対象に陶酔しながら撮っているところがあるということは、かなり濃密に見えている気がしていた。その一方で、画面の中のひとつの印象的な線とか、そういうものに画面の成立を頼りすぎているような印象もあり、その点は難しいとも思っていた。しかし、今回の展示は、そういう以前の明瞭さから遠ざかっているし、「神々しさ」のようなものは見ている方からは感知しにくいと思う。田山さんは今回の展示のほうが、自分のやりたいことが見えやすいと思ったのかな？

田山：いままで頼っていたものに頼りたくなかったから、わざと違う写真や、集落が見えてくるような写真を入れて、写真をわからなくさせたかった。

山方：具体的には、なにをわからなくさせたいの？

田山：自分が「神々しい」と思うものとか……。

榎本：それがわからなくなってしまっていいの？

田山：自分が「神々しい」と思うものなどは、自分の軸になっている。そして、今回の展示の軸になっている写真にも、そういうものを集約させているつもり。でも、神々しさとかだけじゃない、撮ることで見えてくる集落や川の周辺の様子を、今回は作品に入れたいなと思った。

　自分自身が体感したことでしか、自分は表現できないと思っている。川を撮りに行くと、川を渡ったり、何度も蛇行したり、川をくぐっていくような感覚があった。川の境目を網目のように汲んでいくというか……。こういった、自分がその場所で体感したことや、揺れているということを作品に入れたくて、わざと作品をずらしてみたり、いろんな見え方ができる写真を組み込んでみた。

榎本：「神々しい」というような田山さんの感覚だけじゃなくて、実際に目の前にあった具体的なものをもっと見せたいということ？

田山：自分の興味は、そこに暮らす人々にあって……。

榎本：地上的なものというか……。

田山：そうそう。そういう変化に対して、大日方さんが、いままでは空ばかり見てたけど、地面も見るようになったねとトークで言ったんだと思う。

榎本：実際展示してみて、どうですか？前回のトークでは、中流域をもっと撮りたいと言っていたけれど、並べ方とかそういうものは今後どのように変化してゆくんだろう？

田山：並べ方などは、まだ途中で整理ができていないと思う。整理できるように今は追い込みたい。

相馬：リフレクションに参加する田山さんの目的として、自分の写真が決まりすぎてしまいそうで、それを変えたい、というのがあったでしょう。展覧会を終えて、変えられたと思う？

田山：選びは変わってきたと思う。写真を撮っていても、前は対象物と一対一のような感覚だったけれど、今は手前と中間と奥と空が、同じ圧力であるのを感じていて、より自分と対象との関係が複雑になってきたように思う。

相馬：前は撮るものがひとつ決まっていたけれど、今は視野が広がった。点で見ていたのが面で見るようになったというか。

田山：そうそう、そんな感じ。あとは、線が変わった。画面上に現れる線が、前は一本印象的な線だけという感じだったけれど、もっと短い線とか、曲がったりとか、ぐにゃぐにゃし始めたなと思う。

山方：以前よりも民俗学的な関心が高まっているということで、見るところや撮るものが変わってきたと言っていたでしょ？

田山：うん。

相馬：本人じゃないから本当のところはわからないけど、それは自分には後付の理由のように思える。撮ってみて、まとめる際に「民俗学」がキーワードとして働いたのではないのかな。写真に直接は写らない、どろどろした気配のようなものへの興味は、以前から続いているんだろうと思うんだけど。

田山：それはずっとある。どろどろしたものを掴んで戻ってきたいと、ずっと思っている。でもそれは自分の感覚でしかないから、何かで裏付けたい。裏付けるために、暮らしや民俗学のことを調べている。

由良：私は根本的には、湖雪ちゃんの写真をいい写真だと思っている。だけど、本人が揺れてしまっていて、その揺れに反応して周りのみんながいろんな事を言って、湖雪ちゃんがますます揺れて……というのは良くないと思う。今後、中流域を撮るときには、誰にも相談せずに撮ると良いかもしれない。

榎本：全員の話が納得できたり、役に立ったりはしないよ。湖雪ちゃんにとって大事なことを言っている人は、すごく少ないのだと思う。無視してもいいし、納得しなくていいし、理解しなくていい話がいっぱいある。「うん、うん」といつも言わなくても大丈夫。

山方：でも、民俗学的な関心は写真に反映するのか、どのようなことが写真に反映して、どのようなことは反映しないのか、ということは考えたほうがいいかもしれない。

相馬：田山さんが反応する対象は、民俗学的な関心が変えるのではないかと思うけどね。ひょっとすると、榎本さんが以前東京を撮っていたときに、普通に考えるとその新興住宅地の光景は民俗学的でもなんでもないんだけれども、そこにある敷石をぺろっとはがすと、昔、ここは今とは全く違うところで……というようなことが見えてしまう……そんな感覚に近いのかもね、田山さんのやっていることも。田山さんの関

心も、民俗学的というか、時間とか、歴史への関心なのかもしれない。

■　榎本の制作

田山：榎本さんはどうやって作品を組み立てていくんですか？

榎本：どういうことを話せばいいのかな。みんながリフレクションのミーティングの際に何度も見ていたとおりだと思う。沢山プリントを作って並べて、何度も並べ直しながら、何が面白いか試行錯誤してゆく。

田山：そのとき手がかりになるのは、視覚的な面白さということ？

榎本：多分形とか、色とか、空間がいかに捉えられているかとか、そういうことが最初の手がかりになる。

田山：表面というか、表層が気になるということ？

榎本：形とか色とかを手がかりに考えてゆくと、風の跡とか雨の跡とか、形や色だけでないものが見えてくる。私も田山さんと逆方向から、同じようなものに向かっているのではないかな。自分にとって最初の、そして最大の手がかりは形なんだけれども、その手がかりを辿ってゆくと、生活のありかたとか、地理のありかたとか、自然のありかたとか、さっき相馬さんが言ってくれたような歴史とか、そういった別のものへ辿り着くという感じ。

相馬：撮る場所を選ぶときは、意味で選ぶの？それとも好みで選ぶの？割と同じ場所にしょっちゅう行くと言っていたでしょ、特に東京の時には。単純に近所だということだけ？

榎本：場所の選択は、最初は単なる思いつきで、段々、写真から見えてきた別のものを辿っていく。

相馬：撮っている時に、場所の意味などは考えていたりする？その場所に行くことの意味っていうことを考えていたりする？

榎本：実際に撮っているときは、すごくバカになっていると思う。なにも考えていないに近い。

相馬：でも、シャッター押すには形に反応するとかそういうことが必要でしょう？光に反応するとか、色に反応するとか。

榎本：そのどれもが働くけど、形が一番強いかな……。

阿部：自分からバカになろうとしているのか、それともバカになっちゃうのか。

榎本：形を辿ってゆくということが、自分自身の世界の捉え方の根本にあって、形を手がかりにすることが、自分にとっては最も自然なやり方なのだと思う。言葉はもちろん捨てられないのだけれど、物の形や線を頼りにしているとき、物の用途とかそういうものをすっ飛ばして物の輪郭を追っている時が、実を言うと一番快感ではある。言葉を介した意味、それとは違うものに従っているという快感。

相馬：ただ、出来上がったものはすごく論理的なものに見えるよね。

榎本：論理が先立つのではなくて……、例えば物理法則は自然のものだけれども、そこには秩序が発見できるというようなことではないかな。

相馬：自分のやっていることを言葉で比較的上手く説明できるからそういうふうに見えるのかな？

山方：撮っているものがそう感じさせるんじゃないの？直線的なものが多いから。

榎本：そうだろうと思う。少なくとも撮影時の私は論理的ではないよ。むしろ、田山さんとか由良さんの方が、言葉が頼りなんじゃないかなというな気がする。集落とか、生活を捉える作業は、言葉と密接に結びついていて、意味が大事なんだろうなという気がするんだけど、どうですか？

山方：他の３人はどうなの？何に反応してシャッター切ってるの？

阿部：私はなるべくなにも考えないようにしようと努力をするかな、一人で撮っているときは。でも、今回の場合はみんなと一緒に撮っているから、その人の撮り方に合わせようとしていた。だから、いつもの意識的な努力は、今回はしていない。普段だったら、なにも考えずに撮って、採取していこうという感じ。でもきっと、直線とか曲線に気を取られたりはするんだろうけれど。反応する沸点をなるべく低くしようとしている。たまに、カメラを身からわざと離して、ファインダーを見ずにいろんな方向に向けて撮ってみたりということもするしね。

相馬：そういうことをするのは、写真の撮り方がひとつに定まってしまうのが嫌なの？

阿部：そう。意識的にずらそうとしている。それは、撮影の時に自分の意識が入るのは嫌だから。その後の作業では入り込んでいいのだけど。

榎本：写真と写真を重ねるのも、阿部ちゃんは全部見ながら意図的にやっているのだよね。

相馬：でも、素材には意図が入らないほうがいいんだね。

阿部：そうそう。でも、あまり意識が入らないようにして撮ったものを全部並べてみると、共通の何かが見えるし、それが見たい。無意識みたいなものに繋がりたいというか……。なるべく何も考えずに採取して、それでも共通の何かが見えてほしい。

榎本：私もそうだな。

阿部：榎本さんはすごく似ていると思う。今回の私は作り方を変えているからそういうやり方じゃないけれどね。

田山：私は「あっ！」て強く反応して、「あっ！」て撮っちゃうからな。阿部さん、榎本さんの２人と逆かな。でも、その反応している「あっ！」という時に、私は無意識でいたい。

阿部：田山さんと一緒に撮っていて、その「降りてくる」感じはすごく良く分かった。シャッター押す時の沸点が高いというか、沸騰する感じで撮っていた。で、私達は沸騰しないようにしているんだよね。

榎本：でも、私たちも時々は沸騰しているんだけどね。

阿部：わかるわかる。

相馬：撮り方としては、大型カメラ（4×5）を使っている由良さんの撮り方が一番沸騰しない撮り方なんじゃないの？

由良：そんなことないですよ。

相馬：じゃあ、沸騰が持続するんだね、だって、１枚撮るのだって時間がかかるんだから。

由良：被写体にもよりますよね。都市のスナップを撮っているときは、綺麗な女の人を撮りたいな、などと思う。例えば、パリを撮るときにはそう思っていた。でも今回熱くなったのは、それまでに撮った自分の写真にない要素を撮りたいという部分。考えているときと、熱くなる時と両方あるけど。

阿部：撮るものを見つけて熱くなって、カメラをセットして……どこまでその熱は持続するの？

由良：いや……私の場合は使っているカメラが良いんだよね。覗くと「すごい！」ってなる。スクリーンに写った映像が、目で直接見ている景色よりも綺麗だから、覗いていてやられちゃう。でも、一方で 4×5 を撮影するには頭の中で編集しなきゃいけない。そんなにバンバン撮れないから。だから撮る前にかなり編集して考えていて、撮影作業は全体としては理論的だと思う。理論的というと違うかもしれないけれど。そして、何に反応するかというと、形も光もあるし、そのときの自分の置かれている立場もある。ひとつというのはないかもしれない。それは、これまで考えたことがないな。

■　展示における匿名性

由良：千賀さんは、この会場で何度も展示しているだけあって、この空間をよくわかっているなと思った。ただ、表参道画廊側の砂山の写真と Musee F の作品の繋がりは、観客にわかってもらうには難しいかなと思った。わかりやすくすればいいわけじゃないけれど、2 部屋にわかれた作品が、同じ作家の写真であるとわからない人もいた。今回の展示だと、会場案内図を付けたりしたほうが良かったかもしれない。

相馬：4 人の作品が混ざって、しかも 2 部屋にわたって展開した今回の展示は、観客に対しては不親切さとか、わかりにくさがあるとは思うんだよね。

山方：でも、表参道画廊側の砂山の写真が榎本さんの写真で、Musee F の写真が例えば山本さん、というふうに別の人の写真と思ってもらってもいいんじゃないの？それぞれの作品に名前も書いていないんだし。

湊：各自の作品としてだけでなく、展示空間全体の成立の仕方というものがあると思う。来場者は、4 人それぞれの作品がどれかを知りたいだろうけれど、自分としては展示空間全体の成立という別のことにも目を向けてもらいたい。

阿部：結果的に今回は、どの作品が誰のものか、ということは展示を一見してはわからないようになっているわけで、そのことについてはそれぞれどう思うの？私は、そもそも今回の作品を「自分の写真」とはあまり思っていない。人と一緒に撮っていて、普段とは撮り方も違っているし、構成の仕方も違うから。さすがに今回の作品を私の写真ではないとは言わないけれど、作家個人として出しているわけではないと

いう位置付けだし、そういうふうにしたかった。でもみんなはどう思っているんだろう？

由良：作品を混ぜることについて言うと、阿部ちゃんはもっと早く具体的作品プランを出して欲しかった。私の写真と阿部ちゃんの写真を重ね合わせるようなこういう作品、好きだし良いと思うけれど、もっと早くプランを出してくれれば、もっと良いやり方ができたと思って、もったいないなと思う。（注：こういう作品＝表参道画廊の中庭に展示した阿部の作品。由良の羽田の写真と阿部の写真を合成し、半透明のフィルムに出力したもの。）

湊：でも、それはみんなの作品を踏まえて作るという、阿部さんが今回採用した作品作りの方法から言って難しい。作品が展示直前にならないとできないことは、最初からわかっていたこと。会期が迫って湊からの提案を受けて、こういう作り方をしたという経緯もある。時間的な遅れがあったのは確かだけれど。

阿部：由良さんの写真と、私の写真を重ねて合成した作品について、由良さん自身の写真の使われ方についてはどう思った？

由良：好きだし、いいと思うけれど、もっと早ければもっといろんなことができた。もっと一緒に作りたかったし、反応したかった。

榎本：自分の反省点としては、阿部さんのプランがもっと未決定で、全体像が見えない時期から、自分自身が積極的に阿部さんに反応し、作品づくりに介入すべきだったと思っている。阿部さんの作品がどんなものになるのかが想像しにくくても、田山さんの壁に阿部さんの作品が入り込んだらどうかという提案はできたのに、自分の作品に関してはそういう提案ができなかった自分が、とても残念だった。作品を混ぜてゆくような展示の仕方が初めてだということもあるんだけど。先が見えない、分からない段階で自分自身が動く度胸みたいなものを、今後はもっと持てるようにしたい。

由良：私自身もそう思っている。

阿部：私も、もうちょっとみんなに自分の作品に応えて欲しかった。自分が一方的になっているような気がして、そのことをみんながどう思っているのだろうと思った。

榎本：お互いにもっと投げあえばよかった。阿部さんでなくても、次に阿部さんのような人と関わることがあったら、もっと早く投げ返そうと思った。

由良：私も投げる準備をいつもしておこうと思った。

阿部：投げ合いたいよね。それで、話が戻るけど、作品の匿名性については、みんなはどう思いますか？田山さんは、自分の作品が自分の作品として十全に扱われているとは言い難いような今回の展示についてどう思う？それぞれ一人ひとりにやりたいことがあって、けれども結果として一人ひとりの意図が見えづらい展示になっていることについては、どう思う？それでいいのかな？

田山：今回は 4 人の作品が混交するように展示されていて、その時点で自分の作品も自分だけの問題ではなくなっていると思う。私はこうした匿名性があったほうが今回はよかったと思う。どの作品が誰のものかがわからないくらいの方が、見る人が長く見てくれるし、そのほうが見る方にゆだねている感じで良いのではないかな。でも、私の作品は壁面的には一直線で長くひとまとまりになっているから、まだ構成しやすかった。これに対して、由良さんと榎本さんは壁面が 2 部屋に分かれてしまっていて、その点はどうだったのかなと気になる。2 人の使用する壁面の決定に対しては、悪いことをしてしまったかなとも思う。

榎本：壁が今回のように短く 2 部屋に分断されることに関しては、個展と同じことをやろうとしたら難しいし、作りにくい。でも、むしろ別れてしまうからこそ、2 部屋で別のことをやろうとしたところがある。そもそも今回の展示には、普通の意味で自分の作品を作るということが目的で参加したわけでもない。前回のリフレクション展への参加を通して、この展示が、個展のようにひとつの世界を作るのとは位相の違う作業になることはわかっていたから。個展の成立の仕方とは違うことしかできないし、違うことをやらなくてはならないと納得して展示に参加していた。

　ただ、展示を終えてみると、お客さんにそういうものを見せる、ということについては、もっと考えるべきことだと思った。この展示を、完成品を見せる場ではなく、作る過程を見せる展示であるともっと意識的に提示すること、 4 人が協働して作る過程の面白さを見せるものにすることができたのではないかと思う。様々な可能性がこの展示には含まれているということを、ミーティングの場を見ていない、この会場しか見られない観客にももっと見せたかった。個展だと自分ひとりでひとつのことを突き詰めていけばいいけれど、この展示が目指していたのは、そういうことじゃない。その上で、何をどうやって見せればいいのか、ということはとても難しいけれども。

相馬：壁ごとに明瞭に作家を分けたグループ展は、作品ごと、作家ごとの対決という雰囲気になるよね。そういうあり方でも緊張感と呼応のあるグループ展はできると思う。だけどそうじゃない時にどうするか……。前回のトークで反省が出なかったのは、今回の展示が、わりと上手く空間の中で作品が調和がとれちゃっているということなのかもしれない。

阪根：匿名性について戻ると、確かに最初は、作品の並びが混ざっているために、どれが誰の写真か戸惑うんだけど、見ているうちに誰が撮った写真かも、それぞれの写真の違いも、良くわかってくるんだよね。

相馬：わかるんだよね、それぞれの視覚の違いが。榎本さんの写真だけ、壁によって結構違う作りになっているから、ひょっとしたら別の作家かもしれないとは思えるんだけど。

榎本：それを第三者として見ていて、阪根さんはどう感じました？

阪根：榎本さんはグループ展と個展を違うと言っていたけれど、見る側の僕としては、やはり個々の作家を感じながら見ている。そして、榎本さん、田山さん、由良さんは、ここに展示した作品を、今後自分の作品集なりポートフォリオなりに入れるのだろうなと思う。でも、阿部さんの場合は、この 3 人の作品が抜けた後で、残った写真を自分の中でどう位置づけていくのかなと思う。この写真は一時的なインスタレーションとしてしか成立しないのか、それとも自分の作品として単独で成立するのか、それが興味深い。

阿部：この作品を今後どう残していくのかということは課題だと思う。この写真の背骨は、みんなの写真にあって、それをつなげて作っていった写真だから、単独で編集するとしたら何か新たに軸を作らないといけない。もしくは、この写真はこの場で消費して終わりなのかもしれない。でも、それでもいいと思って作っている。どうしたらいいんだろう。

相馬：しれっと、何も言わずに自分の作品として使ってもいいかもね。見る方はあまり細かいことは気にしないで最初は見るんじゃないかな。

阿部：全然違う場所で撮った写真を加えて、背骨にしてもいいのかなと思ったりもするんだけど……。固定した作品にするには、別の背骨が必要なんだと思う。まだそれが何かはわからないけれど。

阪根：他の 3 人が具体的な場所を見ているのに対し、今回の阿部さんは、場所を見ているというよりは、写真家に取り憑いたわけでしょう？取り憑いた先になんか見えたものってあるんですか？取り憑いた先に、自分なりの場所が見えたとか……。

阿部：場所がなくなった感じはした。3 つの場所に短期間に一気に行って、自分がどこにいるのか、どこに自分が住んでいたのかさえよくわからなくなった。違和感を感じて、元いた場所に戻ってきても、不安な気持ちになった。でも、その不安な気持ちを抱えたまま参加したかった。

■ リフレクション展での発見と課題

榎本：今回の展示会場で私は、阿部さんには元々様々なタイプのお友達が沢山いるんだなということを目にしていた。音楽の人や映像の人や、アニメーションの人やお好み焼き屋さん……普段から仕事も性格も多様な人と付き合っている。今回は限られた写真家だけとの関係だったけれど、作品作りを通じた新しい関係性の中で、何か阿部さん自身が新たに得たことがあったり、人との関わり方が変わったりということはあったのかな？

阿部：人との関わり方は今までの延長線上かな。発見はいっぱいあったけれど。一緒に撮りに行く人によって、自分が変わるということは発見だった。今回の 3 人は、3 人ともそれぞれの撮り方がはっきりあったけれど、そのそれぞれの撮り方によって、自分自身がその都度はっきり変わった。その過程を通じて、自分は人に合わせるのが上手だ、ということを知った。でもよくよく考えてみると、相手に合わせながら自分を出すのがこれまでも得意だった。

榎本：由良さんは 4 人のなかで一番長く写真を発表してきたじゃないですか。大きな写真集も出しているし。今までも色々な人と関わってきたと思うけれど、それでも今回の展覧会で由良さんが新たに発見したことってありますか？

由良：発見……ありましたね。一言じゃ言えないくらい。一人ひとりについて言うと、千賀さんは、作家としてすべきことがほぼできていると思う。あとひとつ足りない所があるとすれば、今までやったことのないこと、撮りおろしポートレートでもなんでもいいと思うけれど、あえてやらなかったようなことをやってみると、すごく世界が広がると思う。

榎本：他が全部できているとは思わないけれど……でも特に阿部さんと一緒に作品を作っていて、違うことをやってみたいとはすごく思った。

相馬：性格的に同じことをずっと繰り返すのが好きだって言ってたよね。だからこそ、違うことやってみると面白いかもね。

由良：阿部さんは、発想の良さだよね。だからこそ、1 ヶ月早く事が進んでいたら、もっと良いものができて、今年のなんとか賞！みたいになれたんじゃないかと妄想してしまう。

榎本：阿部ちゃんの作品見ていると、私は手を入れたくなるな。もっとこうしたら、って。だから田山さんのところに混ぜようよ、と言ってしまった。

阿部：もっと手を入れてください。そういう反応は、自分にとっては良い回転になってよかった。

由良：田山さんは写真が良いから、周りに振り回されず、このままやるべき……って、笑ってるねえ……。

榎本：田山さんは、振り回されても根本は何も変わっていないところが希望かもしれない。

由良：今回までは、自分と写真に第三者を介入させてきたけれど、次からは自分と写真だけにしてみると、きっと「次の次の」作品が良くなると思う。

■　観客、オブザーバー、ディレクターの視点から

阪根：榎本、田山、由良の３人の共通点について言うと、田山さんが民俗学的な関心と言っていたけれど、他の人のものにもそれは言えるんじゃないのかな。例えば由良さんの写真だって、アースダイバー的とも言えそうだし、３人とも水と生活というようなところがあって。けれども、３人の場所の特徴の吸収の仕方が大きく分かれていたのが面白かった。

相馬：由良さんの写真集のタイトルである『TOPOPHILIA』（コスモスインターナショナル、2012 年）は、場所に対する愛というか執着という意味だけれども、これがこの展覧会を集約しているような気がする。この写真集は都市の境界から都市を捉えようとしているけれど、この展覧会でも境界的なところが多くとりあげられている。しかもこの展覧会においても、中心は最初からあるのではなくて、周辺を辿ってゆくと現れるようなもので、それが由良さんの『TOPOPHILIA』での撮影方法と共通していると思った。

湊：僕はみんなに集まってもらって、最初のプランから随分色々と実際の展示が変化した、その変化が起こった事自体が良かったと思っている。個々の写真の完成度ということに関しては、前回 Place M でやったグループ展の方が高いかなとも思うんだけれども、展示空間全体を作るということに関しては、今回の展示で以前の展覧会よりも随分できるようになってきて、良かったと思う。一方でそのことによって、展示自体のわかりにくさなどの他の問題が生まれていると思うんだけれども。

毎回リフレクション展を企画するときには、作家個々の名前をある面でそぎ落として、それでもなおかつそこに各自の写真があって、展示空間全体で何かを立ち上げるということ、様々な写真が集まることで、ひとつの地場を作りたいと思っている。写真のそういう側面を追求するにあたって、今回の展覧会はひとつのきっかけとなると思う。自分としてはあと 1 回か 2 回はこういう展示をやってみたいが、今回の展示は阿部さんが持っている特異性に依存しているところがある。だから、次回以降の企画では、阿部さんのような傾向を持たない作家たちを集めて、ここで試みたのではない方法を用いて、なおかつ写真が混ざり合って、僕が大切に思う匿名性のもつ可能性を表現できたらいいなと思っています。